（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏名　　松下　道信

本論文は、金代に成立した中国道教の一派、全真教の思想について、性命説を中心に考察をしたものである。中国道教は学術的な研究の歴史が浅く、独自の世界観と特殊な語彙を基に形成された経典群が難解なことと相俟って、これまでの研究の蓄積はまだ十分とは言えない状況にある。特に思想方面の研究は六朝隋唐時代が中心になっており、宋代以降については専門の研究者はごく僅かに過ぎない。したがって、道教史や中国史全体の中で当時の道教思想をいかに位置づけるかさえ、まだ資料の精査と議論を重ねてゆかなければならない大きな課題である。

そのような研究の状況の中で、本論文は、正一教とともに後世の道教を二分することになってゆく重要な一派、全真教の思想について、本格的な分析に取り組んだ意欲的な論文である。

本論文は、序章と本論五章のあわせて六章からなる。序章ではまず従来の宋元道教の捉え方自体について問題提起する。すなわち「新道教」として概念化された宋元道教の中で進められてきた従来の全真教研究に対し、「新道教」自体が仏教を基準にした観点や中国の抵抗史観などからの偏った見方であると批判し、性説の思想史的展開を軸に全真教を理解することで「新道教」という枠組みから解放されるべきことを主張する。次に第一章では、宋代の内丹説として先行する鍾呂派の性命説が後発の全真教南宗・北宗のそれとどのように違うのか検討し、南宗による性説の取り込みの重要性を明らかにした。第二章では、一般に性功を重視するとされる全真教北宗の性命説について、命功との関係を中心に詳しく検討し、当時の華北の過酷な歴史的状況が北宗の性功中心的教説に影響したことを論証した。第三章では、全真教徒の円明老人作『上乗修真三要』に見える「牧馬図頌」を取り上げ、仏教の禅宗の「牧牛図」や儒教の道学の「牧牛図頌」と比較しつつ、三教の中における道教としての全真教の性説にどのような独自性があるかを解明した。第四章では元朝の中国統一前後よりはじまる南宗と北宗の融合のあり方について、頓悟漸悟論の問題を中心に据え、当時の代表的な道士の牛道淳と李道純を取り上げて考察する。第五章では元代の代表的な全真教道士の趙友欽と陳致虚を取り上げ、本来は性功重視であった全真教が命功を重視することになったことを述べ、これが禅に由来する性功に対しての道教としての反動であったことを明らかにする。

以上のように、本論文は従来研究の少ない宋元時代の道教思想について、金代に成立した全真教の性命説に焦点を当てつつ着実に文献を精査し、その歴史的展開の基本部分を明らかにしている。さらに、同じく宋代以降に新しい展開を見せた儒教と仏教思想との関係も視野に入れ、全真教の性命説は儒教の道学とともに、禅仏教の性説の登場に対する批判的継承であったとし、中国思想史の大きな流れに対しても注目すべき指摘を行うなど重要な成果を挙げている。南宗・北宗以外の人々の思想をどう扱うかなど、さらに考察すべき課題も少なくないが、本論文によって明示された数々の新知見が道教史研究上において大変重要な意義をもつことより、博士（文学）の学位を与えるにふさわしいと判断する。